

# 家族縮小、ゆがむ制度

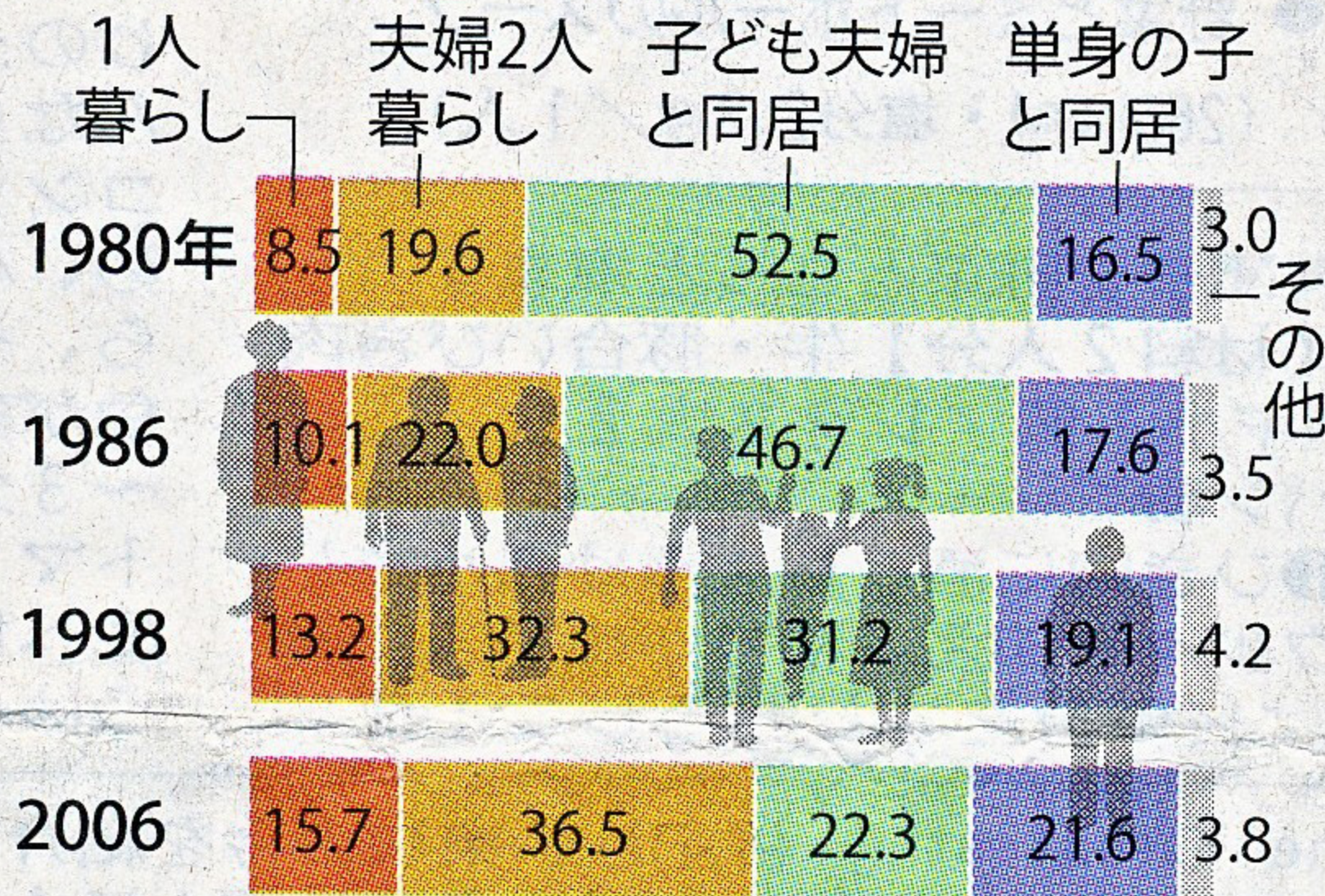
取材班から

「独りきりの介護に苦しんでいる」と訴えた男性たち。「わが家の将来の問題」と不安をつづった手紙。多くの人のとって「息子介護」の苦悩が人ごとではなくなっている現実を改めて教えられた。

暮らしの問題に光をあてる連載「生活ドキュメント」で今回、シングルの息子による介護取材したのは、住民の助け合い活動をしている各地のグループで、「今最も気になっているのが息子による介護」という話を何回か耳にしたのがきっかけだった。

家事経験のない独身の男性が家事と介護で四苦八苦している。どなり声が聞こえて危険な様子なのに、近所づき合いがなくて周囲は助けられない——そんなジレンマが共通していた。昨年、初めて国が行った

高齢者の家族形態 (数字は%)



を介護地獄から解放することが主眼だった」と厚生労働省幹部は話す。介護の主体的な担い手だった「嫁」や「娘」を重圧から救おうという声が女性らから上がり、介護を社会で支援する「社会化」を推し進める力となった。

しかし、社会化すれば「伝統的な家族の美風を壊す」と一部の政治家らが反対。結果として誕生した制度は、「要介護の高齢者が1人で生活できるだけの支援を提供する仕組みにはせず、嫁など家族が高齢者の生活を支えつつ介護サービスを利用する部分的な社会化」になった」と同省幹部は説明する。

ところが、介護保険制度の骨格が作られて10年余。家族の規模は一層小さくな

り、制度が前提にしていた「子ども夫婦が老親を世話する」「夫は稼ぎ、妻が家事・育児・介護をする」という伝統的家族モデルは崩れている。

高齢者の家族形態は、「子ども夫婦との同居」が1980年には5割を超えていたのに2006年には半分以下に急減。「1人暮らし」と「夫婦2人」が半数を超え、「単身の子との同居」も21%へと増えた。グラフ。

こうした家族の変化を受け、現行制度の介護サービスの量では「足りない」と訴える声が反響で目立った。さらに男性は家事力も低い。大きな葛藤を抱えた「息子介護」は、社会の仕組みが家族の変化に追いついていないひずみの象徴とも言えるだろう。

小さな家族だけでは、介護も育児も担いきれなくなっている現代。読者の手紙からは、介護で失職にまで追い込まれる状況が息子だけでなく娘にも起きていくことがわかった。介護・育児と両立できる職場へと転換することは、企業の責任になっている。

そして、支え合いの消えた地域で、もう一度「つながり」を作り直すことも必要になっている。

(東京本社生活情報部・榎原智子、大浦哲、大阪本社生活情報部・古岡三枝子)